『広い道の奥の部屋』

　広い道の奥は行き止まり――のように見えたけれど、アリス・ディーダムが壁にランタンの光を向け、ファルが地の力も用いて探った所、奥に部屋があることが分かった。
　石をどかしていくと、通気口のような穴があった。
「私にはちょっと無理みたいですね……誰か行けますか？」
　アリスはメンバーを見回す。
　アリスは小柄ではあったが、魅力的な女性体型であるため入口も何とか入れたといったところだった。
「先が狭くなっていて、抜け出せなくなったら大変だ」
　１３歳のファルも、少々厳しいかもしれない。
「どうやら俺の出番のようだな！」
「私も行きます。プルク君、ゆっくり進んでくださいね」
　プルクとイーリャ・ハインリッヒが名乗り出て、プルクが先に入ることになった。
「気を付けて。狭くなってきたら無理せず、戻ってくるんだぞ」
　ファルは心配そうに２人を見送る。
「う一結構辛いなこれ。イーリャ大丈夫か？」
「ん一、頑張ります」
　四つ這いでの移動はかなりの体力を要した。
「あ、出口？」
　行き止まりと思えたが、壁を押したらパコッと外側に開いた。
「ん一？　倉庫みたいだ。あ、やべえ！　誰か来る。イーリャ出てくんな」
「え？」
　続いて外に出ようとしたイーリャだが、プルクにランプと何かを渡され、押し戻されてしまった。
「先に帰ってろ。ここ、水の神殿みたいだ」
　プルクがそう言った後、バタンとドアが開く音が聞えた。
　それから、偉そうな人の声。プルクはひどく叱られているようだった。
（ここから来たってことがわかっちゃったらまずいですよね）
　イーリャはプルクに言われた通り、プルクから渡されたものをもって、皆の元に戻っていった。

　プルクは夕方魔法学校に戻ってきた。
　かくれんぼをしていたら、倉庫に迷い込んだと誤魔化したとのことだ。
　彼が咄嗟にイーリャに渡したのは、倉庫にあった手書きの本だった。
　昔の文字らしくて、メンバーには読むことが出来なかった。

このリアクションは以下の方に発行されています。
アリス・ディーダム
ファル
イーリャ・ハインリッヒ